



淨業修行次第

附一 一枚起請文同註釋

目次

一 勤行前意得

二 向佛壇念想

三 燒香讚

四 金剛合掌 引文註釋

五 三寶禮

六 弥陀觀音勢至禮拜

七 罪障懺悔

八 發願文訓讀

九 念佛開闢文

十 訛略念佛事

十一 別回向仕樣

十一 總回向文

十二 亡者回向祈願

十二 知死期願

十三 淨經讚歎偈

十三 善導忌

十一枚起請來由

十六吉水遺誓文

丸同註釋

平安心起行和歌

廿起請文大意

廿附錄標目大意

廿三無能和尚發願讚

廿四同いろは和讚

目錄竟

合印

△ 三角印ハ 心よりよる
唱 此印ハ口ハ ころるちり

● 黒丸印ハ 其所々心得之
一字下之 書クハ註ちり

右の印をよく意得りけ此本を
ひらきて勤むる

一 勤行前意得

三 勤行手拭別用意す

△ 毎時勤行前に手水を洗ふ

身も心も清浄よしと極樂参りし

おしむ佛前に至るべし

心よ念じ口みせ
極樂参りしとるべし

二 佛壇よ向て念想

△ 佛壇の扉を開くべし。此内よ正真の

阿彌陀如來在と信じて念佛三遍唱へ

恭しく開らき。先本尊に黙禮して

小音み念佛申るが燈明を挑香爐

ふ火を点どるべし

●それより佛前ぶつぜんに居ゐるより合掌がうしやうして坐ざ
ちまぐさ一禮いちらい十念じゅうねんころんかりて合掌がうしやうを
胸むねに當あてたれ文ぶんを心こころに念ねんじ口くちふころんよ

唱

今拜いままゐ奉たてまつる本尊ほんそんの我われを濟度きよどせんが
爲ために極樂ごくらくより來迎らいおうしたまはる

唱

善光寺ぜんくわうじに如來にょらい告つたまはる
聖德太子せいとくたいし告つたまはる

はらひてるびんびんはげよみる人ひと
心こころをいりていそぐさるらん

唱

我命終われいのしゆうの時とき必かならず引接ひきつぎしたまはる
十劫じゅうしやく

●一切れ佛菩薩を拜とらん合掌を
 ひらひあて目を閉て佛面と念とて
 一心又念佛とて

三 燒香讚

香より彼方の極樂浄土れらひとめ
 香より此方の娑婆界らりとめ

●香を捻とて次下の文を唱へるが焼香す

唱

願我身淨如香爐

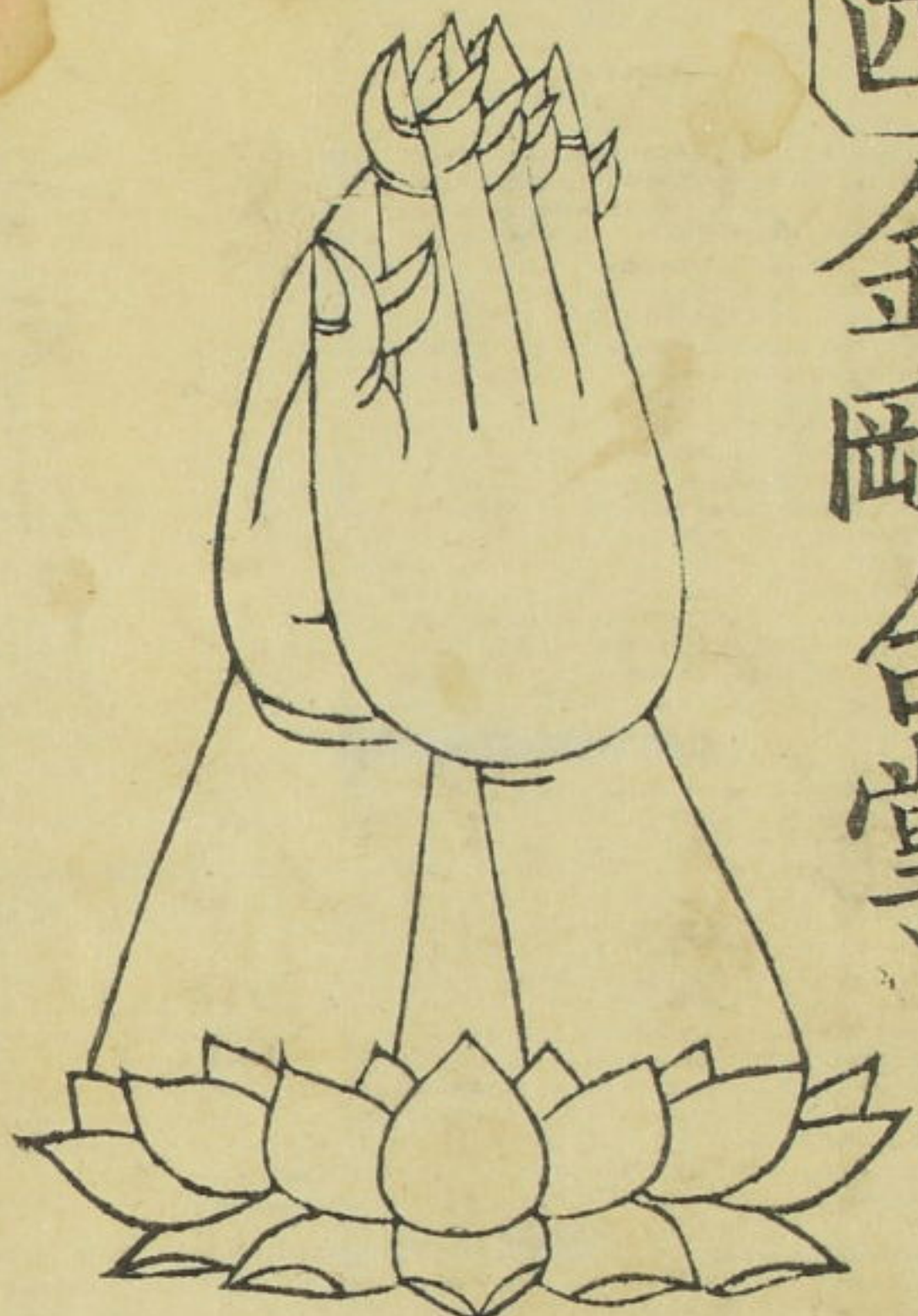
願我心如智慧火

念々焚燒戒定香

供養十方三世佛

●文意 此香を以て阿弥陀佛と始め十方三世諸佛を令此佛殿に請と奉り降臨影向したまふ佛と皆供養し奉ると意得へ

四 金剛合掌



合掌又手と額不當て
禮とく一即ら圖のどく
十れ指されたるは海也

● 觀經曰合掌又手補南無阿弥陀佛稱
佛名故除五十億劫生死之罪
云云梵語

● 此ハ歸命合掌と翻す金剛合掌
是也一切の印の代ふ此印と用ゆ故又普印とも
云又五指ハ五智也一切の印五智と出と故
普印と云一心歸命の義より禮佛念佛乃
時必ど此金剛合掌を用ゆる金言諸經論
見り金剛合掌とハ自ら廣大供養の義と
備ふ今の焼香の讚文によく符つる南無とハ
歸命なり手ハ皈命合掌をなり口ハ南無

阿弥陀佛と唱へ意は皈命想に住と三業相
應し決定往生と事疑ひる

●委し尾州八事山興正寺諦忍律師撰
述の合掌又手本儀編を見よ

●合掌はたるごころの内をさるめかふすべの
少しらのうと入れてひと打合とるよと
と禮拜の時手内を疊へ付くす頭へ

と下ふはけて兩の手を開らぬ頭上はさうの
べて佛の御足をけりて手に載ててさうと
かりて兩の掌とめて自面と覆とるうれ

●禮拜は立るの合掌又手して彌陀れ相好に
心をさるめ禮文と唱へ合掌を額よめて目
を閉て一心よ白毫相と念して禮とる

● 觀佛三昧經云若有人須臾頃觀白
毫相若見若不見除却九十六億那
由他恒河沙微塵數劫生死重罪常
作此想大除障滅罪云云

● 善導大師曰衆生口に常々佛を称とい佛
即ら其徳を聞ふ身小常に佛を禮敬す
とば佛となりて見たり多し云云

佛を念ふれば佛即ら其徳を知たり○
衆生佛を憶念すとれを佛亦衆生を憶念
しとる○佛の身口意乃三業と行者身
口意の三業相離とるゆゑに親縁と名く

● 禮に九品有る今の誓首禮を上品至極と
す功德十種あり恭敬滅罪の根本なり
至心の歸命禮すべし

五 三寶歸敬禮

礼をまゝ頭と下ふ付るが
十念とく入る

唱

南無釋迦牟尼佛等。一切三寶我今

稽首禮。迴願往生無量壽國

禮一

唱

南無十方三世盡虛空徧法界。微塵

唱

刹土中一切三寶。我今稽首禮

迴願往生無量壽國

禮一

南無西方極樂世界阿彌陀佛

願共衆生成歸命。故我頂礼生彼國

礼一

唱

南無西方極樂世界 觀世音菩薩

願共衆生咸歸命 故我頂礼生彼國

唱

南無西方極樂世界 大勢至菩薩

願共衆生咸歸命 故我頂礼生彼國

●惣して禮拜ハ餘れ佛菩薩も其意得右同

七 罪障懺悔

佛前ニ坐し合掌して
左の文をとるゝ

無始以來無量罪 今世所犯極重罪

日々夜々所作罪 念々歩々所起罪

念佛威力皆消滅

命終決定生極樂

唱 懺悔已て至心に阿彌陀佛に皈命し奉る。念十

● 重ねて深改悔と云ふ

唱 曠劫已來無量の悪業を造現在此身は十悪と

恣身是等の罪障を消滅して助けをもと十念と云

八 善導大師發願文

合掌して心念
念一口に云ふ

唱 釈迦牟尼の御子等。今汝の時ふ際

て。ん 歎悔せむ。ん 諸罪せむ。ん

失ふをやむ。あもんふも徳の若

痛なく。身ん快楽に。して。福
定ふ。心ら。う。く。聖い。現
— 乃い。仏の。身。新ふ。業—
て。阿弥。仏。心。お。よ。東。洋。主。也

— 欠。終。く。彼。心。に。了。り。こ。り
て。六。神。通。と。地。十。方。界。に
入。り。若。の。心。主。と。救。攝。せ。ん。
度。有。法。界。法。界。ん。や。我。新。と

亦乞のしと。ぬぬ

らうて。まん。のふは佛お

海令——

同行同修れ節の時宜と随ふ

九念佛開闢文訓點

出觀無量壽經第九真身觀

唱

光明遍照

十方世界

念佛衆生

攝取不捨

唱

有難勿怖

是則正定業の正行

●勤行の長短の行者に意樂と任

十 訛畧念佛の事

●問て曰念佛の三國ふ弘通とていづるも別して
我朝聖徳太子已來の祖吉水上に在る世に
も今時れど、那昧陀、那以陀、南昧陀、奴和以
陀、南無和以陀など唱ふ訛畧念佛ありや
答上古ふいまだ曾て此事を聞かず日本末世
の悪習と見えたり訛畧乃起りて考ふる

元來六字の念佛の合せうのべき、鉦を曲打
れ、鉦の念佛を合する故に傍正に取違はるる
てとのぼく、訛略の念佛みちるると知らるる
六字の中、弥をぬくゆゑ俗に云はる念佛と
し心をはりてありたりよの空也、惠心元祖
時代にはある弊風なり、是近代乃訛謬なり
何れ訣もあらざるに、等の三字四字を唱へる
肝心の阿弥の二字ある事なり、既に六字あり

らざるごとく本願に叶らんや。本願に叶はざらんば
往生の正因しんぎんハハチハズばあるん世間の人々、簡
に訛畧念佛も、弥陀は通どべし。喻ハ三良兵衛
とさぶと呼は答るがごとく。是大なる意得損
ト。ちり僕わがの分ぶんとして主人をさやうに呼ば即時
小殺せうころさるべし。一大事だいじの六字は正否を沙汰する
に私わたくしの了簡りょうかんを加へてゆるごとくあるも、六字を闕
き文字と謬あやまを苦くるしめんとす。釋迦しやくぢあの經文と

見と三國念佛弘通くわんつうの諸大祖師等曾て許
したまはざる所なり。我祖圓光大師勸めたまふ
本願の念佛ハ南無阿彌陀佛と六字よく連續
して佛の説せつの如唱じゆへよとて教へたむひりし誠
小六字は名号なごうは一字とん無量無邊むりやうむへんの功德
あり別て阿彌陀の三字ハ衆徳しゆとくの根源こんげんとして
至要しやうなり。是と一字も欠くしたハ片輪者ぺんりんしやに成也
恐おそつれ甚しんとさるる心ありん人の其意そのいと得て流ながれ

唱

奉為本師阿彌陀如來報恩謝德

念佛一萬回
勤て十念

十一 別回向仕様

佛菩薩諸天諸神祖師師匠
等ハ報恩謝徳と称ス一精気
ハ證大菩提ヲ為ト回向トス

を酬て源を知リ昔も還アセ六字ハ闕減ス
ク訛謬ヲ免ヤリ小意を以て修行トス
但是念佛者ハ心得の為也必しも他を誹スルコト

唱

大恩教主釋迦牟尼佛唱六方恒沙諸佛

唱

大悲觀世音菩薩唱得大勢至菩薩

唱

六道能化地藏菩薩唱來迎二十五菩薩

唱

極樂海會聖眾唱三國傳來諸大祖師等

唱

光明善導大師くわうくわんぜんぜん唱うた圓光東漸慧成大師えんくわうとうぜんえいせいだいし

唱

鎮西聖光上人ちんせいせいこうしやうじん唱うた御代々上人等ごだいごだいしやうじんらう

唱

日月星辰梵釋四天にちげつせいしんぼんじやくしよてん唱うた和光大小神祇等わくわうたうしよじんぎらう

唱

佛法守護諸天善神ぶつぽうしゆごしよあまぜんじん唱うた佛法興隆聖德太子ぶつぽうきやうりゆうせいとくたいし

唱

奉為今上皇帝寢養ほうゐいまじやうていおうじんやう唱うた東照權現御代々等とうしやうけんげんごだいごだいらう

唱

為天下泰平國家安全五穀成就萬民安穩たみかてんかうへいこくかうあんぜんごくじやうじやうあんゑん

唱

生々四恩謝德しやうしやうしよおんしやくとく父母衆生ふぼしゆじやう唱うた先祖代々七世父母等せんぞごごいごせのふがらうらう

唱

現在師匠益々親眷屬いまにしやうしやうえきえきしんけんりく唱うた志諸精靈面々ししよしよせいりやうめんめん

唱

●戒名俗名呼出—回向の終ふ

有緣無緣怨親法界平等利益

願共諸衆生往生安樂國

●念佛一きろ勤て次の總回向れ文と唱十念と下

七

唱

願以此功德

平等施一切

同發菩提心

往生安樂國

士右總回向文の善導大師御作

衆人同修此時誦讀音讀宜隨也

士亡者回向祈願

十九

唱

上來回向一奉る一切諸精靈等如來れ
神力を以悉く極樂淨土江引接一なま
へと至心ぬ回向一
十念とべし

高 知死期の願

毎時勤行の終るに此願文を唱へ祈願とべし

唱

仰ぎ願くは上來所修れ功德を以て
我等命終ふ臨まば必死の時至る事と
告たまひ佛及聖衆現前して上品蓮
臺ふ引接一なま
合掌又手一して
十念唱ふべし

○重^{かさ}返^{かへ}て祈^こ願^ごとく

臨終念想の要語
出^し往^{じやう}生^{じやう}要^{じやう}集^{じゆ}中^{ちゆう}末^ま

唱

如^に來^にの^の本^{ほん}誓^{せい}ハ一^{いっ}毫^{ごう}も^も謬^{みやう}ア^ア願^{ねん}と

佛^{ぶつ}決^{けつ}定^{てい}して我^{われ}を^を引^ひ接^{げつ}したまへ

●同^{どう}行^{ぎやう}一^{いっ}坐^ざる^るは我^{われ}が^が現^{げん}前^{ぜん}衆^{しゆ}を^を引^ひ接^{げつ}したまへと異^い口^く同^{どう}音^{おん}ふ^ふ十^{じゅう}念^{ねん}とる

●元^{げん}祖^そ大^{だい}師^しの^の御^ご弟^{てい}子^し辨^{べん}阿^あ真^{しん}觀^{くわん}勢^{せい}觀^{くわん}上^{じやう}人^{にん}等^{どう}要^{じやう}集^{じゆ}の^の肝^{かん}心^{しん}なりとてほね此^{こゝ}

文^{ぶん}を^を唱^{とな}へたまへ

次^{つぎ}小^{せう}一^{いっ}禮^{らい}合^{がう}掌^{じやう}又^{また}手^てと

退^{たい}坐^ざと

唱

●御經讀誦おんきやうどくせんと思おもひ心こころみ任まかせて大經

觀經くわんきやう彌陀經みだてきやう六時禮讚りくじらいさん等勤修とうきんしゆとん

〔圭〕淨經讚歎開經偈じやうきやうさんたんかいきやうげ 讀誦どくどくれ始はじめ此文このぶんと

念々ねんねん思おもひ聞き淨土教じやうどくきやう 文々ぶんぶん句々くく誓ちか當あ勤ん

憶想おくしやう長時ちやうじ流浪りうりやう苦く 專心せんしん聽き法ぽう入い真しん門もん

ハ

●右文出善導みぎぶんしゅつぜんどう大師だいし法事ぽうじ讚さん

後ご白河しらかは法皇ぽうわう十三年じゅうしんねんの御遠おんえん忌い元祖げんそ

大師だいし御導師おんどうしとて此文このぶんを唱となへたゆひ一ひと事こと
御傳おんでん第十の卷じゅうしのかんみ見ゆ

淨業修行次第 終

十六 善導忌

宗祖光明善導大師と弥陀乃化身
大唐ふ化生と専口称念佛を弘通し給ふ
元祖大師も此師を師とて浄土門を開ふ
三月十四日入滅浄土宗ハ勿論念佛行人の報
恩の爲毎歳御正忌を勤む

十七 一枚起請來由

古來に相傳ふ下賀茂の明神韋提希夫人貴女
と現と上人御臨終に道場來り本願念佛とて
決定往生疑ひるに趣を和字と以一紙に書しと與へ
たまふと請ふ則化女に請ふ住せ授たまふ源智傍に居
聞化人の請ふと世に流布せむ願ふ我も施

たまたまと請ふ仍て重て筆を染るるなり
○大師御齡八十歳建曆二年正月二十三日
御臨終兩日前勢觀房源智上人願ひに
よつて染筆したまはるる源智上人思ひ給ふ
やうの念佛乃門人邪義を存ざる人ねかくして
安心をそとるる大師世をさうりたまはるる

みどり又異義を立ほるるを病床に
臥したまはるといふも宗門に肝要をさるる賜
らん事を請ひ受け末代念佛者乃鏡み
備へたまはるる故に 大師御自筆に上の両手と
印に證據と成したまはるるなり
○勤行の終又ハほのく心静なることある

御消息を恭敬頂戴七四し御遺言を直に
拜聽七五するおしをるるを是稱名念佛
安心起行の正義を意得邪義の安心は
惑る稱名廢忘たる多々同行一
坐するば俱に難遭れ想を成し踊躍歡喜
して慎で聽聞あるを

〔六〕吉水遺誓の文

も海へ我朝おもりの
智若達七六の沙汰しり
観念七七のまふもあはれ又學

問^{たん}とーここのあつりやい

とらてやいんおとらるん

初段

唯^た此生将乐のきんせんおとらるん

とらるんおとらるん

この
てん
別
らん
り

うひやぐはまらるんぞと思ひ

とらてやいんおとらるん

作^しのん

二段

宗門一大事の肝要なり
深く候と云ふなり

とらてやいんおとらるん

皆決定して南を阿弥以佛

めてはまゝのそと思ふ由小

ひこりり作りるま 三段

けおふお奥くゆうふふ事を毎せ

と二言の憐あはれみまららききなな乾

ふふききにに作りるま 四段

ききりりをを信しんぢぢんん人にたたららんん代

のの法はをを信しんぢぢんん人にたたららんん代

不念の愚^ぐ鈍^{どん}のあふ^あま^ま——て
地入道の正智のあふ^あま^ま——
て智志の振舞をさ^さら^ら——
く^く——あふ^あま^ま——
五段

み^み——あ^あま^ま——

清上家のあ^あま^ま——
玉^{たま}——あ^あま^ま——
ま^ま——あ^あま^ま——
ま^ま——あ^あま^ま——

形義と隔るんを為す可好
と記し一年

建曆二年正月廿一日源空判

〔九〕 同註釋

^初段 ところこそ我朝ふりろくれば智者

達れと云申はるゝ觀念の念みわらひ

今上人勸めたまふ念佛の心は佛と念ごころ
觀念の念佛もあらず聲とあげごころ

口称の念佛あり

二十

又學問がくもんをして念ねんれ心しんををこころえ

申まを念佛ぶつふもあらずべし

念ねん即すなは空くうなり有あ念ねん無む念ねんともふ本ほん無むなりを
又また一ひと念ねん不生ふしうなり悟ごつと其その心こころを

申念佛ふもあらずとあり

二に唯ただ往生じやうじやう極樂ごくらくなりなりは南無阿彌陀佛なんむあみだぶつ

申まをて疑ぎひぬく往生じやうじやうととるとぞと思おもひひととると

申まを外がわは別べつの子こ細候さいこうなりなり

是こゝより御起ごき請まを文ぶんの肝かん要よう之を次つぎ下した元祖げんその御ご哥か音おん味みをを寛かんい

人々我
身はま
思取り
安定
とて
安心の
骨見

大師曰疑ハざる心よりわかれぬるうまは
どうする外は別のとてつる子細る所よ
とを付る時往生の道はゆるり
此一章段の御遺誓一篇に骨髓ありて
極樂往生乃要路なり等閑ふらるる
只一片ふらと過る事なり御誓言乃

士

肝要此一段あり心をとりて本文と窺
みぐく往生のあらめは餘事をほぐす
南無阿彌陀佛と申どもありめて極樂へ
行き生ると安定とる事是一大事れ安
心なり此一段なるハ數遍よむべし自然と
心決定とるなり心決定とれば往生の業ハ

定るるり一定と成り人の一定不定ふじょうと成り
不定るるりとのふ事ことをよよくくく成りひ
合とあべべー決定といといととももううとといいとと
はは唯ただううががひひれれるる
念ねん佛ぶつ申まをとと成なるる人ひとの本ほん願ねんをを疑うたがふふとと成なるる
とも自心じしんふ決定心具ぐとと成なるるはは成なるるががえ

がが成なるるももたたがが往生じやうじやうののたためめとと成なるるひひと
念ねん佛ぶつとと成なるるはは一いつ念ねんもも多おほ念ねんとと皆みな決定心
の念ねん佛ぶつふふとと成なるる正しやう定ていのの業ごうありありほほとと日にっ課か称しょう
名なははとと成なるる人ひとハハ念ねん々々相あ續つとと成なるる佛ぶつ願ねんふふ順じゆんとと成なるる
故ゆゑふふ往生じやうじやう決定ていのの人ひとなりなり頼たの母もとと成なるる思しひ
てて畢ひつ命めいとと期きとと成なるるとと成なるる懈ゆるるるとと成なるる此こゝ等とう

乃行者法佛常ま護念ごねんしたまふゆへなり
時ふのどろそへ自然と心勇いさとそありがごとく
感涙かんみとゆふ事あり是はこれ決定れ上
の歡喜心くわんぎと知るべし

○又多年念佛修行とる人の中は實まことに往生
覺束かくすくぬくおりの人おろくもゆる其ゆへと案

とろふ凡夫ふんぷ生得しょうとくの疑煩ぎはん惱なう去さるごとく且かつ念
佛の安心と得とくと心得こころえするゆへ深く信しんじり
心乃發はたるがごとく本より信心發はたらざれば
念佛ねんぶつよりさく進すすむがごとく尚なほ此起請文
えざる人めて侍まへる見とつども信しんぜざれば
見みざるがごとくおぼつたなきハ不定乃事

なり不定とあり三十三バ不定なりと宣ふ三十三
順次おんじの往生よみハ遂すいごとかぬ一本願ほんがん乃趣ゆを
志しづる人ハ善人ハ念佛にぶつ也なりも浄土じやうどハゆ紀
悪人ハ念佛にぶつととも往生よみ遂すいごとき中におひ
る事こと皆自己みづかの推量おしりやうふして毛頭もうとうも弥陀みだつ陀
乃本願ほんがんふりた事ことなり元もとより十方衆生じふぱうしゆじやう乃

願ねんふも一切善悪ぜんあく乃凡夫ぼんぷとらをハ誓ちかひ
のつり然しかもハ他力たうりきを頼たのむ人ひとハ罪障ざいじやう重おもく
とて往生よみいふと思ふとぬれ罪深つひふかとん
はりてもかる身みとぶふととて也給たまふ
たふとよとふとかりととんげれ念佛にぶつ
を申まをとぶ南無なむあもとと佛ぶつと唱となつたたをひ

給へ阿彌陀佛といふ事あり南無れ二字ハ
たどけめといふ義ありと知るべし一たび
も弥陀の本願を頼む人のしるべき事
ありと思ひ定むると安心決定の念佛者
といふあり

○所詮我力ちよんりからうはとどべき往生ふあり阿彌陀

如來本願の力ちよんは行ゆべき浄土なりは
念佛ちよんぶつはらまゝちよん所作ちよんさあり來迎ちよんごうハ佛乃御
誓ちよんひるありと一すふ信しんとて行住坐臥ちよんじゆうざわいよ
念佛ちよんぶつはばつりうおがつかれた心なり
てんありがたは弥陀の御恩ごおんなり
日々ふこいしき極樂浄土ごくらくじやうどなり

熊谷蓮生

のうごう

三十五
及くそよめ念佛の申し候ぞ

やらふやじハ弥陀なるめい

空也上人

のうごみ

一こびも南無はるごと佛といふ

蓮乃うふよのからぬい

三

安心起行意得の和歌

元祖大師

のうごみ

阿弥陀佛と口ハ唱心よは

なごけふとやいふるり

●右に和哥八十八願の中第十八念佛往生乃
御願文の意より極樂往生の安心此一首に

足りぬく心得て念佛ごんぶつとて一日課いちにちか
念佛の始はつみ此哥このうたと吟ぎんして勤ごんむべし

三さん但たゞし三心四修さんしんしゆしゆと申事まをされ候まをさひみる決けつ

定ぢやうして南無阿弥陀佛なんむあみだぶつとて往生じやうじやうとす

ととととかり内うちに籠こもり候まをさりとは

六

極樂ごくらく往生じやうじやうの為ために念佛ごんぶつとればなほおほく

三心さんしんも四修ししゆも皆みな其その称名しょうなまの内うちにありて

決定けつぎん往生じやうじやうとありまかみ三心さんしんも四修ししゆもあり

五念ごねんなりま厭離えんり穢土ていど攸あ求もと浄土じやうど心こころも

稱名しょうなまの内うちにありてありて

段四 此外このやうみ奥おくゆゑ事ことと存ぞんびび尊そんれ

おまじみみまふる本願ほんがん候こう下したとハ

ごせうごん此御誓言ごせうごん有ある故ゆゑふ世よふ一ひと枚まい起おこ請こと号ごうママリ

段五 念佛にぶつと信しんぜん人ひとハはたたひひ一ひと代だいれれ法はうを

よくよく學まなぶぶもも一ひと文ぶん不ふ知ちれれ愚ぐ鈍とん身み小せう

ああららてて尼に入に道だうハハ無む智ちハハ輩はい小せう同どうと

智ち者しやのの振あ舞まととままくくととたた一ひと向かうみ

念佛にぶつととままくくととたた

大師曰聖道の悟は智慧ときかみて生
死とくわんと念佛ハ愚癡ハ還つて往生
と愚癡みかつるといふハ覺へる事と
いふれよといふはあつと又學問をといへ
かゝるといふはあつとあつとの智慧
覺と物といふは唯佛乃願力小身と任

とるといふなり

本為凡夫兼為聖人とて弥陀本願乃
御本意ハ一文不通の愚鈍乃尼入道を
目つけ三學無分乃となくとあつねみ
唱とハ必と助りといふはあつとあつと
あつとあつとの身ハ罪深といつとあつと

佛の大悲うた事と悦ひ我が身の免あはれ
角のまはと疑ふ事なぐたぐらふことすしふ念佛
とくし必ず往生はとる

世 起請文大意略解

此起請文の浄土往生の肝文一大事の安心なり
心小助給と思ふに安心なり口小南無阿弥陀

佛ととるなり起行なり安心起行具足とれ
必と往生に此外小奥深き事と存ぞん若
存ぞん存ぞんといふを釋迦弥陀諸佛の憐と
いふづれ三悪道小落ら弥陀の本願にゆれく
浄土小往生なりとす趣と御詞のなすなりふ
御心いづづく一大事の後世の浮沈を

かけく誓ひなす御起請文おんおこしねがひなるをうふ
わりのるる大師滅後鎮西上人の流ながを
汲ひしもの邪義の安心みほぐはされざるは
皆御遺誓おんいせがひなるまのかり尊重珍敬そんじゆうちんけいして
祖恩と報そんおんと奉ほうるべし前來ぜんらいれありし心を心
得るうふ念々相續そうぞくして称名しょうなまと勤つとむる斗と也

此旨善導大師圓光大師鎮西上人等このたまひ代々
御相羨ごさうぜんなり念佛ねんぶつ乃行者なげんぎやうふはるる事と信
ぜざらんやたしむ釋迦しやくぢや一代乃法をよろしく
學まなぶと信智者しんちやうなりとも念佛修行ねんぶつしゆぎやうして極樂
を修しゆふ身みふりて其學問まなぶと捨て愚癡ぐちり
かたりたゞ一向いこう念佛ねんぶつとべしとかり

奥書おくしょ滅後めつご乃なり邪義じゃぎと防ぼくぐんぐんごんごん所存しよぜんと
とと終しゆん畢へいととババ大師だいし滅後めつご末代まくだい西方さいほう乃なり行者ぎやう者
此起請文こしきうもんと念佛ねんぶつの鏡かがみふかけて安心起行あんしんぎぎやうの邪じゃ
正ただと照てうしとよととととんんババ知識高僧ちしきこうそうととへへんんりり。
人ひとなりとも願行相續がんぎやうしやうぞくの稱名しょうめい乃なり外ほかふ異ことなる新しん
奇きの安心起行あんしんぎぎやうと勸すすむる人ひとああららババ元祖げんそ大師だいし乃なり

御遺誠ごいじやうみ背せいりる滅後めつごの邪義じゃぎと心得こころえて必かならずに
惑まどははららく事ことううんん吾われ大師だいし末法まっぽう衆生しゆじやうれ生死しじゆ流りう
轉てんと憐あはれむむととままひひて念佛ねんぶつ往生おんじやう乃なり願意げんいと和語わご
みみすすととややととううふふととううええととんんととううふふ書しよ
ののううたたままふふ法語ほうごなり

末世まご機教ききやう相應しやうおう易行いぎぎやう大利たいり無上むじやう功德くどくの本願ほんげん

なり万劫まんごうもあひあひくく千生せんじやうも始はじめく遇あふ不
可思議くしぎ乃本願ほんがんなり本願不可思議くしぎなりとバ
御遺誓ごいせいも亦復また承うけるなりいふくもバ本願
念佛ねんぶつも即すなはちしたる安心あんしんなり故ゆゑも本ほんより祖師そしハ
勢いき至いたる乃應現おうえんみして三昧さんまい發得はつとくの聖者しょうじやなり
滅後めつご既すでも五百五十年ごひゃくごじゅうねん來きりすくあふ縁縁く

天下てんかも弘通くわうちゆうくく口稱くちゆう念佛ねんぶつの一門いちもんよりを弘院くわんいん
乃寶國ほうこくも往生おんじやうする事ことなりして知るしるなり
誠まことも不可思議くしぎの御起請文ごきじやうぶんなり遺代いだいをの
りれり授與じゆゑしめり御記念ごきねんなり猶報なほむかひし
ても報むかひしめり宗祖そうそ大師だいしの高恩こうおんにあり
とや且かつも三心さんしん四修ししゆ等らうなり意得いとく委あづかりて附録ふろく上

卷くわん小記せうきなり

四十三 毎時勤行の終ふ此御遺誓と讀く
安心安定し且祖恩と報し奉るべし

其節せつふは

心蓮社しんれんしゃ淳譽じゆんよ任阿彌陀佛にんあみだぶつと

一佛淨土いつぶつじやうと結縁けつえんを希こいふの

願がん共ぐ諸衆生しよじゆうじやう

往生じやうじやう安樂國あんらくこく

右本書一卷附録

全部六冊

此書世に流行して元祖大師の御遺誠と

信じて愚ならずも安心ふ惑ふ事なく賢く

とくとも本願ふとむと心得をのびく一向

專修の念佛者たる人若志すべ極樂往生の

同行たふらんとの歎且附録毎に老若共ふ

現當二世要用乃意得と記と是志くもの

我が門弟子ひて小等ひて一きき無智の人々れ為らふ身と
脩め之信しとものふ言なんけともなんくんくんくん全まく
智者の為ふとるん非あどる人誹謗ひする事る
猶なまく信男信女等先靈考妣忌辰
追お資しの席ま有縁えん乃靈位れい作福修善しゆ於こ砌せ
此書こと求もとめく念佛信仰ぶつの人々らにあててこの書を

四十四

法ほと永世えい小流りゅう傳でんとるの功德くどく廣大くわいふくて兼あく
佛祖ぶつに報恩ほうおん共とも小樂りやく邦はうの因縁いんえんとるべきまのとりや

寶曆十三癸未年初しん又また弥陀感應日 任阿謹識

右發願文及一枚起請文ハ 八事山諦忍和上深筆

廿二附録

全部六冊

圓光大師畧傳同安心法語。彌陀名号功德。彌陀因位誓願現世護念利益附四重問。菩提念證據事。三心四修。百石遍利益。諸佛諸神拜意得。病氣立願意得。元祖十二尊号及宣命三帝戒師等事ヲ記。平生用心。臨終畧式。葬送同施主意入。骨揚。齋供養。葬時施物九品分万石以下。富百姓町家準格。三年喪事。中陰種々追善仕様。骨納法。別時念佛事。諸善根千僧供養。卒都婆功德。五蘭盆。元祖恩。益孝心物作善堂記。

廿三 みのぐりし和えん

歸命敬禮西方界
 みのぐりし弟子等
 正念をてんむ西よびき
 称名をきり相續し
 此時清浄大海衆

超世願王彌陀尊
 臨命終れ夕邊よハ
 頭をかひけ手と合せ
 往生想み安住せん
 蓮臺さへけ樂と成し

寶蓋幢幡たつみのまはして
異香紫雲いしやくしゆん妙華めうけを
攝取しゆくの光明くわうめい身みを照てし
身心しんご更さらふ苦痛くつうなく
金蓮こんれん臺たいふ乗のりせしめ
彼所かのところふところをりるまは

四十六
無量壽佛むりやうじゆふつと圍繞にわうじやくし
行者ぎやうじやの前のまへに來迎らいごうし
無始むしの罪障ざいじやう消滅しゆめつし
深禪しんぜん定ぢやうふ入いるごとく
上品じゆんぴん引接いんせつたんに入いる
持もちたは六通りくつう具足ぐそくして

還かへりて生死しんじの海うみに入いり
發願はつがん已いて至心ししんなり

流浪りうりやうの衆生しゆじやうと救攝きうしやくせし
阿彌陀佛あみだぶつの敎命きやうめいに奉ほう

光明遍照
念佛衆生

十方世界
攝取不捨

廿 いろはは和わん

一心しん歸命きめい阿彌陀佛

二世にせ安樂あんらくの御誓願ごせいがん

三心具足れ修行者ハ
五妙快樂の體と受け
七寶莊嚴微妙の國
九品蓮華の上の坐
いざかろろん極樂へ
はやく頼り慈父の彌陀

四生鹿悪れ身と捨て
六通無礙れ徳と得て
八功德水金池の中
十地願行成就せん
ろく道輪廻の魔郷より
いづろれ間の迷い子の

ほろみ便らん方とは
こるる御名とまふま
りやく上るれ法をれん
る一日累夜たそそん
わが身ごとたれ罪人を
よふみえとに御誓言

つごろとめい遠方れど
ちろくそちびきななを之
ぬる間も心はけぬけ
をきぬ一立居に励む
かろるれ救いこそんを
たのめ直の後世ハ

人華げれ上えんに化生めいじうとそ
つねみ見佛らんぶつ聞法もんぽう一
なぐ不退ふたい位いを得え
むぢぢうがふ疾しやくする
おぼしめ所ところよしおれも
れそれおのき憂惱うのうして

四十八
りのま無生むじう理りと悟ご
ねんく佛道ぶつどう増進ぞうじんす
らくいひまのく國くにさ
うるれ住家じゆうか安やすくは
のどけ心露こころつゆもほ
くほみ常つねに身みに迫せまる

やよろ思おぼへ人ひとぢらん
けうふ賢けんきこちとまき
これび生死しやうじとはるんば
ておのちて勇ゆうじぐ
さごちならん世よれ書かひんえ
ゆちかなるゆちあひんえ

まさんまを身みと受うて
ふ一議ぎふ妙めうなる縁えんあ
ひてあつらと待まちびきを
あすとたのそなとあ
きのふそく人ひとかふらわ
めある前まへにあらんよ

みはる常るの理を
まきるの業をぬる捨て
まを日暮れぬ空
すまらして生れん

くふよりのハ露乃命とやかくん
花に臺も置身とたりんば

しげん思ひ今より
ひも修行れ功とほ
そのあつとけ息た
京九重れ華乃臺も

右兩和讃は東奥の良崇無能和尚
まがら綴て給いて称名れ助業と
まら浄土をねぶ行人の誰うみれを彼岸
せざらんや予も隨喜のあより蓮友乃
為る印一置ものあり



南無阿彌陀佛

八華山帝忠



天明六年六月廿日

真譽 栄山親成信士

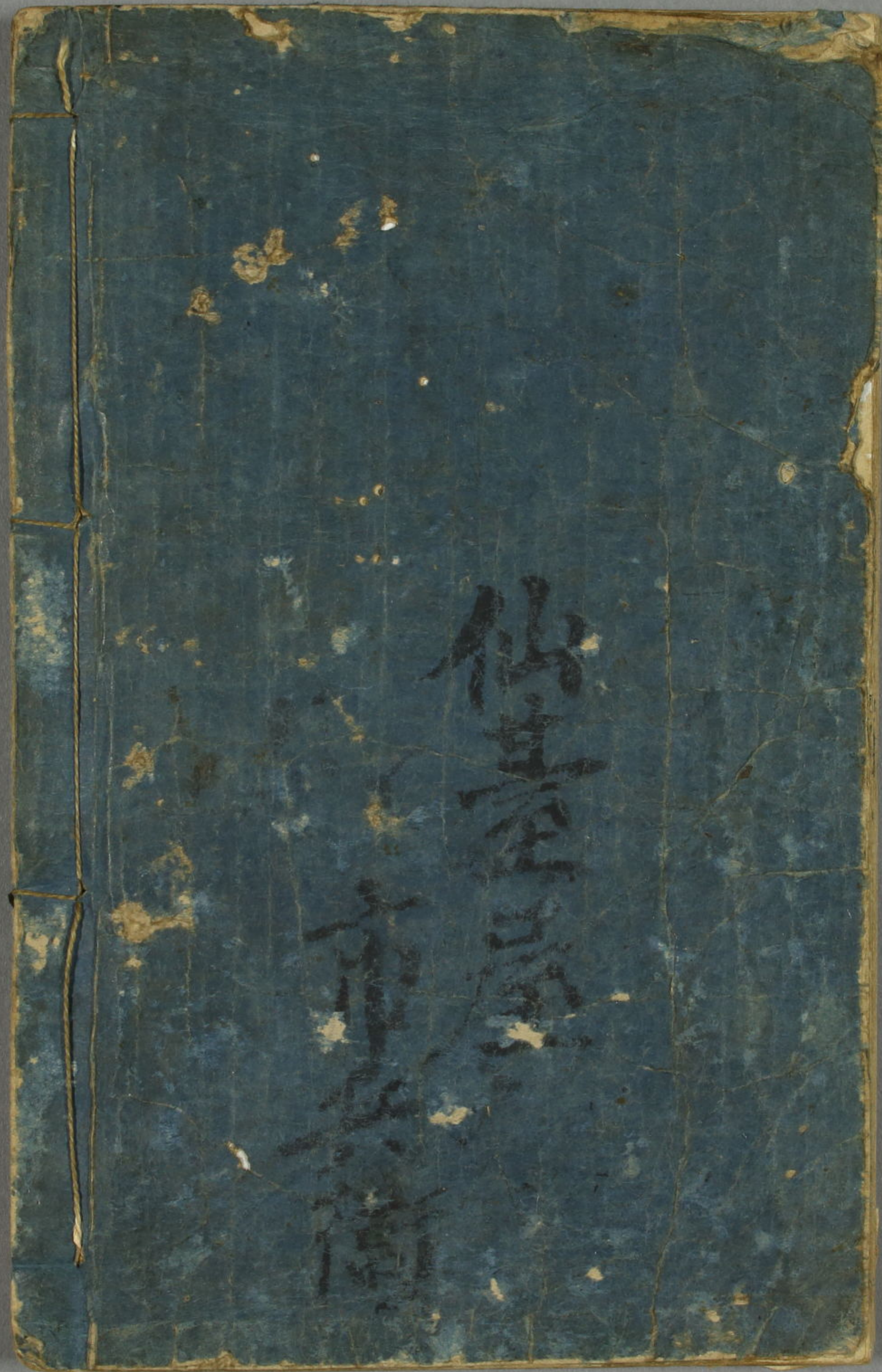
天明六年六月廿日

實譽 親寶妙栄信女

三拾三回忌

露金殿古

日 弥 七



仙臺集